世界名作劇場

小公女（プリンセス）セーラ

『妖精たちのパーティー』

第 41 話

提供　ハウス食品工業

制作　日本アニメーション
　　　フジテレビ

脚本中西隆三

登場キャラクター（第41話「妖精たちのパーティー」）

セーラ・クルー
ミンチン院長
アメリア先生
ベッキー
ピーター
モーリー
ジェームス
アーメンガード
ロッティ
ラビニア

ジェシー
ガートルード
ラムダス
クリスフォード
高級子供服店の主人

エミリー（人形）
シーザー（猫）

1 ミンチン女学院・表（朝）

ミンチン女学院・表（朝）振鈴の音が聞えている。

2 同・馬小屋の中

同・馬小屋の中聞える振鈴の音。
既に、セーラの姿はなく、エミリーと、父母の写真額がワラの上に置かれているのが見える。

3 同・教　室

一隅の暖炉の前に坐り込んで、石炭をくべているセーラ――

×　　×　　×

教卓を前に、ミンチンが、ラビニア、ジェシー、ガートルード、アーメンガード、以下の女生徒たちを、にこやかに見渡す。

傍に控え立つアメリア――

ミンチン「皆さん……明日は、なんの日だか知っていますね？」

女生徒たち「はあい……」

ミンチン「では、ロッティ……」

ロッティ、年少組の机で立上る。

ロッティ「ええと……ええと……」

どっと笑うラビニア以下の女生徒たち、

×　　×　　×

傍の暖炉から、そっと囁くセーラ。

セーラ「ロッティ、万聖節よ」

×　　×　　×

ロッティ「あッ、万聖節だ！」

ミンチン「そうです……全ての聖者たちをお祭りする大切な日です
ね……では、その前の晩、つまり今夜がなにか知ってい
ますね」

女生徒たち「はあい……」

ミンチン「アーメンガード」

アーメンガード、立つ。

アーメンガード「ハロウインです」

ミンチン「そう、あらゆる妖精が集って来て私たちの身近かに姿を
現わすと云い伝えられている万聖節の前夜祭です」

アーメンガード、席につく――

アメリア「そこで今夜は、この学院でもハロウインのパーティを開
く事にしましたのよ」

どっと騒ぐ女生徒たち――

ミンチン「静かに…静かになさい！」

静まる女生徒たち――

ミンチン「セーラ……」

セーラ、はっと立上る。

セーラ「はい、院長先生……」

ミンチン「アメリアと、ラビニアさんに聞いて、今夜必要なものを買い整えるように」

セーラ「はい、判りました」

フッと冷笑でセーラを見るラビニア。

4 同・台所

ジェームス「なにィ?」

と、渡された紙片を手に、セーラを見返すジェームス

と、脇にモリー、ベッキー。

ジェームス「ハロウインだからって、なんだって、こんなにカボチャをごっそり買い込まなきゃならないんだ」

セーラ「あ、それはラビニアの注文なんです」
ジェームス「なんだって？」
モリー「判ったよ。アメリカじゃ、ハロウインにカボチャを沢山使うそうだから、院長先生はラビニアさんに気を使って、アメリカ式にやるつもりなんだよ」
ジェームス「へえ、なるほど」
セーラ「それで、買物が多いので、ベッキーと一緒に行ってもいいでしょうか」
モリー「ああ、いいよ。但し、市場でピーターなんぞと遊んで来たら許さないからね」
セーラ「はい。モリーさん……」

5 同・表

使用人階段を上って来る買物篭を手にしたセーラと、

ウキウキするベッキー。

ベッキー「よかったですねえ、お嬢様……私の田舎でも、毎年ハロウインは村中で賑やかにやるんですゥ……愉しみですわァ！」

セーラ「(微笑) ベッキーったら……さ、行きましょう」

ベッキー「はい、お嬢様……」

二人、スクエア広場の中へ――

6 クリスフォード家・居間

窓外に―― セーラたちが行く姿が見える。

窓辺で、呆然と見送る例の高級子供服店の主人と、ラムダス。

ラムダス「あの、左側の少女ですが」

主　人「あ、あの少女なら、私もよく知っていますよ」

ラムダス「ほんとですか」

主人、暖炉の方へ振返る――

燃える暖炉の傍に―― 例によって車椅子に坐ってい
るクリスフォードと、その脇に蹲っているアフガン犬。

主　人「実は、あの少女は、以前、父親と見えて……」

7 フラッシュ（第二話）

洋服店内で、エミリーをセーラに渡す主人と、傍に立
つセーラの父親。

主人の声「うちの看板にしていたフランス人形を買い求めた事があ
りましてな」

8 クリスフォード家・居間

主　人「その後、父親が亡くなって、気の毒な身の上になったと聞いていました。しかし、あの子が、こちらのお隣りに住んでいたとは、存じませんでしたよ」
クリスフォード「なるほど……君が、あの少女の事を知っているとあれば、なおさら結構だ……あの気の毒な少女の為に、服を仕立ててやって貰いたいのだ。但し、隣りに住むこの私からだとは、感づかれないように……」
主　人「（微笑）お任せ下さいまし。なに、あの少女の服でしたら、寸法をとる必要などございません。ちゃんとここ（頭を指す）に控えてございますから」
クリスフォード「（微笑で頷く）では、よろしく頼むよ、御主人」
主　人「かしこまりましたとも……」

9

コベントガーデン市場の全景

コベントガーデン市場の全景、買出し人たちの往来。

10 同・一角

掃除道具を片手にしたピーターの前に、セーラとベッキーが来ている。

ピーター「へええ、あの学院でハロウイン・パーティをやるんですかあ……そいつは面白そうだなあ」

セーラ「それで、買物をこれだけしなければいけないの」

セーラ、紙片をピーターに渡す。

ピーター、受取って眼を通す。

ピーター「ひやあ、カボチャを生徒の数だけですかあ」

ベッキー「それに、お嬢様、アメリア先生の分も、いりますです」

セーラ「ええ、そうなの、ピーター」

ピーター「やれやれ、こいつは荷馬車が必要ですよ」

セーラ「えッ、そんな」
ピーター「エヘヘ、任しといて下さい。これだけ野菜を買って貰うんですから市場の馬車でお送りしますよ」
セーラ「まあ……」
微笑でベッキーと顔を見合せる。

11 街の通り

御者台にピーター、その脇にセーラ、後ろの荷台に、野菜篭二つを転がらぬように押えてベッキーが乗っている荷馬車が走って行く――

12 ミンチン女学院・表

その荷馬車が着き、ピーターが御者台から飛び降りる

と、荷台へ行き、カボチャの山積みになった野菜篭を使用人階段口へ運ぶ――

セーラも降りると、ベッキーと二人で次の野菜篭をおろし、階段口へ運ぶ。

セーラ「有難う、ピーター」

ピーター「なあに、久し振りにお嬢さんを乗せられて、ごきげんですよ……じゃ、愉しいハロウインを……毎度ありィ」

荷馬車に戻ると、御者台に飛び乗り、ひと鞭あてて走り出す。

見送って、ほっとなるセーラとベッキー、その篭を二人で運びはじめる――

13 同・遊戯室

ラビニア以下の女生徒たち全員が、ハロウイン・パー

ティの飾りつけをしている。入って来るアメリア

アメリア「（見廻して）さあさあ皆さん、ハロウインの飾りつけは、進んでいますか？」

×　　×　　×

飾りロープを張っているラビニアと、ジェシー、アーメンガード――

ラビニア「アーメンガード、早く、そこを縛るのよ！」

アーメンガード「あ、待って、もうすぐ……」

途端に持っていたロープが離れ、ロープはバランと吊れさがる。

ジェシー「駄目ねえ！　グズ！」

×　　×　　×

別の一方で、棒を持たされているロッティ――ガートルードが、その先端に白い粉袋を結びつけようとしている。だが、疲れたのかロッティの棒が下るので仲

々結べない。

ガートルード「ロッティ！　ちゃんと持ってなさいよ！」

ロッティ「（泣顔）だって、重いもん……」

ガートルード「泣かないの！」

ロッティ「また怒るゥ……（泣く）」

×　　×　　×

そこへ野菜篭に山盛りになったカボチャを運び込んで来るセーラとベッキー。

アメリア「さあ、カボチャが来ましたよォ！……皆さん、それぞれ好きなのを択んで下さいね」

女生徒たち、わっと集って野菜篭からカボチャを択ぶ――

アーメンガードと、泣顔のロッティも近づいて来る。

その時、入口に立つミンチン――

ミンチン「アメリア……」

アメリア「はい、お姉様……」

ミンチンに促されて出て行く――

顔を見合せるセーラとベッキー――セーラ、篭から

残ったカボチャ一つをロッティに渡してやる。

セーラ「さ、ロッティ、あなたの分よ」

ロッティ「ありがと、セーラ・ママ」

14 同・台所

ジェームスとモリーが、クルミを刃物で割っている。

空の篭を持って戻って来るセーラとベッキー。

ジェームス「おう、いい所へ来た……このクルミを割って、中身をとり出すんだ」

セーラ「え？」

モリー「なんだか知らないけど、ハロウインに使うんだってさ。早

くおし」

セーラ「はい、モリーさん……」

モリーとジェームス、出て行く。代って仕事にかかるセーラとベッキー。

15 同・院長室

ジロリとアメリアを見るミンチン——

ミンチン「アメリア……私がこの学院で、ハロウインのパーティをやる事を許可したのは、誰のためだと思っているのです」

アメリア「そ、それは……ラビニアさんの……」

ミンチン「そうです……この学校の経営に大切な特別生徒の希望ですからね……でも、経費は出来る限りおさえるべきです。判っていますね、アメリア」

アメリア「は、はい、院長先生……」

16 同・台所

半割りクルミの中身を除いているセーラとベッキー。
泣顔のロッティが、カボチャと料理用のナイフとフォークを手に入って来る。

ロッティ「セ、セーラ・ママ……」

セーラ「どうしたの?」

ロッティ「あたし……カボチャのランタン、作れないもん……」

セーラ「まあ……皆で、カボチャのランタンを作っていたのね、いいわ、作ってあげるわ」

ベッキー「お嬢様、それなら私、得意です」

セーラ「まあ……じゃ、手伝ってね」

ベッキー「はい、お嬢様……」

二人、急いでロッティのカボチャで提灯(ランタン)を作りはじめる。

17 同・遊戯室

大騒ぎで、カボチャの提灯を作っているラビニア以下の女生徒たち――

18 クリスフォード家・居間

暖炉の前の車椅子にクリスフォード、アフガン犬に話しかけている。

クリスフォード「気の毒に……隣りの少女も父親を亡くしたのか……」

――悲し気に、鼻を鳴らせるアフガン犬。

クリスフォード「私の探している、ラルフの娘も、不幸な日をすごしていなければよいのだが……」

クリスフォード、呟いて、じっと暖炉の火をみつめる

（中CM）

19 ミンチン女学校・表（夜）

ミンチン女学校・表（夜）ガス燈がともっている。

20 同・一階廊下（夜）

それぞれに着飾ったラビニア以下の女生徒たちを前に、ミンチンと、脇にアメリア――

ミンチン「では、ハロウインだからと云ってハメを外さぬよう、アメリア先生の云う事をよく聞くんですよ」

女生徒たち「はあい……」

ミンチン「アメリア……では、あとを頼みましたよ」

アメリア「はい、お姉様……」

ミンチン、階段を上って行く。

途端に、わっと歓声をあげる女生徒たち。

アメリア「シィッ……さ、ハロウイン・パーティのはじまりですよ」
はしゃぐ女生徒たちと遊戯室の方へ――

21 同・台所（夜）

鍋を片附けているセーラとベッキー。
外出姿のモリーとジェームスが入って来る――
モリー「さあてと。私たちは、久し振りに院長先生からお許しが出たんで、芝居見物にでも行って来るからね」
ジェームス「あとを頼んだぞ」
セーラ「はい、モリーさんにジェームスさん」
モリーとジェームス、腕を組んで出て行く。
見送って吐息するベッキー。
ベッキー「やれやれ……ハロウインでも遊べないのは、私たちだけでございますねえ」

セーラ「ベッキー……」

その時、戸口にアメリアが来る。

アメリア「あ、セーラさんとベッキー、パーティが始まるから手伝って下さらない？」

セーラ「はい、アメリア先生……」

セーラとベッキー、アメリアに続く。

22

同・遊戯室（夜）

飾りつけられた室内で、ラビニア以下の女生徒たちが、半割りのクルミのボートに小さなローソクを立て床に置かれた大きな金盥の水に浮ばせてみている。

入って来るアメリアとセーラ、ベッキー。

アメリア「さ、クルミのボートが用意出来た人は、ローソクに火をつけて、ハロウインの占いをはじめてみましょう」

女生徒たち、それぞれに燭台の火を移し、火のついたローソクのクルミ・ボートをそっと大きな金盥の水面に浮べる。

アメリア「さあ、皆さんの人生を占う船出がはじまりましたよ……ローソクが燃え尽きるまで無事に航海を続ければ、その人は幸せに長生きするそうです」

女生徒たち、波を立てようと、金盥のふちを揺らす。その水面で、あちこちに揺れ動くクルミのボート――はしゃぐロッティ――

セーラもベッキーも愉しそうに見守る。その背後で、そっと半割りクルミの一つにキリで穴をあけているラビニア。囲んだジェシーとガートルードが怪訝に見る。

ジェシー「ね、どうするの、それ」

ラビニア「フフ……」

ガートルード「穴なんかあけたら、すぐ沈んじゃうわ」
ラビニア「シィッ……これはセーラのよ」
二　人「えッ……?」
　　　ラビニア、アメリアに呼びかける。
ラビニア「アメリア先生……!」
アメリア「(振返る) はい、なあに?」
ラビニア「あのォ、セーラとベッキーをパーティに入れてあげていいでしょうか」
アメリア「まあ、ラビニアさん……私もそう考えていた所よ。さ、
　　　セーラさんとベッキーも一緒にパーティをしましょう」
セーラ「は、はい、アメリア先生……」
　　　ラビニアが、先刻のクルミボートを渡す。
ラビニア「これ、あなたの分よ」
セーラ「ありがとう、ラビニア」
　　　ラビニア、別の一つをベッキーに渡す。

ベッキー「あ、ありがとうございます！」
アメリア「さあ、ローソクの火が終った人は交替して！」
ラビニア、ジェシー、ガートルード、それぞれにクルミボートのローソクに火をつけ、水面に浮べる。アーメンガード、セーラ、ベッキーも、火を点けて水面に浮べる——
一斉に金盥をゆらし、波を立てる女生徒たち——
アメリア「さあ……いつまでも船がフチにくっついてる人は、一生家の中にとじこもってる人になりますよォ」
——ひとつが金盥のフチから動かない。
アーメンガード「ええッ？ ヤダア、どうしよう」
どっと笑う女生徒たち
——二つが並んで中央に進む。
アメリアの声「二つの船が並んだら、その持主たちは一生の大部分を一緒にすごす運命です」

顔を見合せるセーラとベッキー。
その一方で囁き笑うジェシーとガートルード、ラビニア。
ジェシー「フフ、一生メイド同志としてね」
ラビニア「今に沈むわ」
揺れる水面で——　セーラの船に近づくラビニアの船。
一瞬ぶつかり、ラビニアの船がひっくり返って沈没する。
どよめく女生徒たち——
ラビニア、キッとセーラを睨みつける。

23 同・ミンチンの部屋（夜）

ベッドで、ミートパイを食べ、ワインを呑んでいるミンチン——

24

同・地下の食堂（夜）

用意されている夜食や、大きなケーキ。
入って来るアメリア以下の女生徒たちとセーラ、ベッキー。

アメリア「さあ、今度は、リング・ケーキですよ」
ケーキを囲む一同――

アメリア「このケーキには、指輪がひとつ隠されています」
アメリア、ナイフを入れると一同の皿に配り出す――
手伝うセーラとベッキー。

アメリア「もし、その指輪が入っている所に当ったら、その人が一番早く結婚する事になると云う訳です」
真剣な表情で切られたケーキをフォークで突ついてみるロッティ以下の女生徒達。
セーラもベッキーも、確める。

アメリア「ホホホ、みなさん、真剣な顔をして」

云いながら、自分の皿のケーキをフォークに刺し、パクッと口に入れる。途端に、

アメリア「ウムッ……」

慌てて口から出したのは、指輪――

アメリア「まあ、私が、一番先に結婚なんて……ど、どうしましょう！」

どっと笑う女生徒たち――

25 同・三階廊下（夜）

どこからか、時計が深夜を告げはじめる。

眠っていたシーザーが、大きく伸びをして起上る――

26 同・地下の食堂

夜食の終ったあと――
アメリアとラビニア以下の女生徒が、それぞれに、カボチャの提灯を手に集っている。
アメリア「さ、これが今夜最後のもよおしです……そろそろ妖精たちが、私たちの廻りに姿を現わしている時間です……では、カボチャのランタンで、暗い所を照して、そっと探し出してみましょう……」
女生徒たち、思い思いにカボチャの提灯をかざして探しながら出て行く――
アメリア「皆さん、ローソクの火に気をつけるんですよ」
アメリアも、カボチャの提灯を手に出て行く――
取り残されて、ほっと見送るセーラとベッキー。
ベッキー「さ、お嬢様、これからが後片附けで大変でございますよ」
セーラ「(微笑) 大丈夫よ、ベッキー。さ、頑張りましょう」
ベッキー「はい。お嬢様……!」

二人、後片附けをはじめる――

27 同・裏　庭（夜）

ドアが開き、カボチャの提灯を手に出て来るロッティ
――探しながら横手へ廻る。
続いて出て来るラビニア、ジェシー、ガートルード、
怪訝にロッティのあとを見送る。

28 同・馬小屋の中（夜）

ギキッと扉が開き、提灯を捧げたロッティが、そっと
入って来る。
――ワラの上にエミリーや写真立て。
ロッティ「セーラ・ママも、エミリーも、こんな所で寝てるんだわ

……可哀想……」

近づいて、エミリーを抱き上げようとした時——

ギキッと、傍の明りとりの窓が外から開いて、無気味な化物顔のカボチャ提灯が三つ、ロッティをのぞき込む。

ジェシーの声「こらあ、私は妖精だぞ」

ガートルードの声「ロッティ！」

ラビニアの声「たべてしまうぞォ！」

仰天して見上げたロッティ——

ロッティ「キャア！」

と悲鳴をあげて、カボチャ提灯とエミリーを投げ出し、扉から飛び出して行く。

明りとり窓に、カボチャに代って立上るラビニア、ジェシー、ガートルードたち、見送って、プッと吹き出すと、ロッティを追って去る。

バタンと閉った窓の戸の下で―― 投げ出されたカボチャ提灯のローソクがワラに移り、チョロチョロと燃えはじめている。

29 同・洗い場(夜)

食器を洗っているセーラとベッキー。
突然、泣きながらロッティが飛び込んで来る――

ロッティ「セーラ・ママ! 怖いよォ!」
セーラ「ロッティ……どうしたの?」
ロッティ「お化けが出たんだよォ!」
セーラ「えッ……」

廊下を―― 窺いながらすっと切れるラビニア、ジェシー、ガートルードの姿。

セーラ「大丈夫よ、ロッティ……じゃ、私がお部屋まで送ってあげ

るわね」

ロッティ「うん……」

セーラ「じゃ、ベッキー、お願いね」

ベッキー「はい、お嬢様……」

セーラ、ロッティと出て行く。

30 同・馬小屋の中（夜）

次第に拡がる火――

31 同・二階廊下

ロッティを送って来るセーラ――

セーラ「じゃ、おやすみ、ロッティ」

ロッティ「おやすみなさい、セーラ・ママ」

ロッティ、自室のドアに消える。
ほっとして引返すセーラ――

32

同・洗い場（夜）

洗い物をしながら、鼻をうごめかせ、首をひねるベッキー。セーラが戻って来る。

ベッキー「あ、お嬢様……なんだか、こげ臭い匂いがしませんでしょうか」

セーラ「え……？（見廻す）」

ベッキー「なにか、ワラの燃えるような……」

セーラ「ワラの燃える……？」

はっとなるセーラ――

33

同・裏庭（夜）

飛び出して来るセーラとベッキー、

34

同・横　手（夜）

廻り込んだセーラとベッキー、はっと立尽す。
馬小屋の明りとりの窓や扉のすきから、もうもうと煙が吹き出し、赤い火がチラチラ見える。

セーラ「エ、エミリーが……」

セーラ、夢中で扉へ走る――

ベッキー「あ、危い、お嬢様！」

35

同・馬小屋の中（夜）

飛込むセーラ。既に一面の火――

セーラ、火をくぐってエミリーと写真額を掴むと戸口

へ逃げる

どっと追う炎――

36 同・ミンチンの部屋（夜）

飛び込んで来るアメリア――

アメリア「お姉様、大変です、馬小屋が火事に……！」

はね起きるミンチン――

ミンチン「な、なんですって！」

37 同・馬小屋の前へ

轟々と火を吹いて燃える馬小屋――

バリバリと屋根が焼け落ちる――

×　×　×

エミリーと写真額を抱いて、茫然と炎をみつめている
セーラと――ベッキー。

（第四十一話　終）